

3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) デルフィニウムの定植 (超促成栽培)</p>	<p>(今月の作業のポイント) デルフィニウムの定植 12月出荷用オリエンタル系ユリの定植 バラの管理 シクラメンの管理</p> <p>本県の主力品種である‘ガンマーアーミー’や‘ブルーマジック’等を11月から出荷する作型では、植え付け適期が9月中・下旬となるため、以下の点に注意する。</p> <p>9月は残暑の厳しい時期がある見込みのため (H23.8.25 高松地方气象台発表) 定植 10 日前にはハウスを寒冷紗で被覆し、2～3 日前には定植床全体を十分灌水し地温の低下を図る。</p> <p>定植には夏場クーラー育苗されたセル苗 (72 穴) を利用するが、セルから抜き取った苗は根鉢を乾かさないように注意し、生長点が土に埋もれない程度の浅植え、定植後は十分灌水して活着を促進する。活着後は土壌表面に常に水分がある状態では根の張りが浅くなるため、表面が乾いたら灌水する。</p> <p>なお、夜温が 15 を下回る前に暖房準備を行い、低下する場合には 15 以上に加温することでロゼット化を防止し、花茎の抽だいを促す。また、日中は 25 以上の高温に長時間遭遇すると花飛び現象を起こす場合があるので遮光を実施する。</p>
<p>(2) 12 月出荷用オリエンタル系ユリの定植</p>	<p>オリエンタル系ユリを 12 月に出荷するには、氷温貯蔵球を 9 月に定植する。まず、解凍は 10～15 で 3 日間程度行う。その後、高温期の上根の伸長促進と葉焼け症の発生を回避するために、芽伸ば</p>



写真1 初期生育の状況



写真2 プレティンク処理終了時の球根

項 目	作 業 内 容
<p>(3)バラの管理</p> <p>(4)シクラメンの管理</p>	<p>し(プレ・ルーティング)処理(具体的な方法は8月の農作業を参照)を必ず実施してから植え付ける。</p> <p>栽培圃場は排水が良く有機質に富む土壌が好適で、土壌酸度が高いと鉄欠乏症が発生しやすいため、pHは5～6に調整する。定植前には寒冷紗被覆により地温の低下を図り、定植は日中を避けて朝夕の涼しい時間帯に行う。植え付けは上根が十分張れる深さが必要で、少なくとも10cmは覆土する。定植後は、十分に灌水し、地温の上昇と過乾燥防止のため稲わらでマルチングを行う。</p> <p>写真3 稲わらマルチによる地温上昇防止</p> <p>オリエンタル系ユリは、日照不足によるプラスチング(花飛び)はほとんど問題とならないため、植え付け後も出蕾までは遮光して切花品質の向上を図る。この時の遮光率は45～70%の遮光資材を用いて行うが、切り花品質の向上のためには照度3～5万lxは確保する。</p> <p>バラの施設栽培では、寡日照後の高温と強日射により葉焼けを起こしやすい。また、花蕾の発達後期に35℃程度以上の高温に遭遇するとブルヘッド(奇形花)が多発する。</p> <p>対策としては、換気に努めるとともに、寒冷紗やアルミ蒸着ネット等を日中高温時の数時間展張し、室温の低下を図る。遮光は、日射しが強くなる時間に合わせて開始し、打ち切り時間は日の長さに応じて徐々に早くする。</p> <p>日照時間が短くなるにつれ、また天候不順により日照量が低下するとシュート(新梢)の発生が少なくなるので、株元の口ゼット枝や弱小なブラインド枝を切除し十分に光が当たるように整枝作業を行い、切り花本数の確保に努める。</p> <p>9月は花芽が継続して分化し、分化後の花芽も急速に発達してくる時期で、気温の低下とともに生育が旺盛となり株も大きくなる。</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>肥培管理は、窒素：リン酸：加里を2：1：3程度とし、9月上旬から窒素濃度で50ppm、その後徐々に上げて開花期以降(10月頃)は75～100ppmで管理する。</p> <p>遮光は、日射しが強くなる時間に合わせて開始し、打ち切り時間は日の長さに応じて徐々に早く、日中の気温が30℃以上にならない程度で最小限にとどめる。</p> <p>夏季の高温や栄養生長が強くて花芽の発達が遅れ、年末開花が間に合わないような場合は、ジベレリンによる開花促進処理を行う。処理時期は9月上旬で、処理濃度は1ppmである。</p> <p>また、幼葉の生長と花芽の充実、花首の徒長防止、さらに鉢のバランスを良くするために、この時期から最低月1回は葉組みを行うとともに、病害の発生源となる枯れ葉も除去する。ただし、葉組みは最初から強く行うと葉や葉柄にストレスを与え、高温に耐えきれず枯れ込んでくる場合があるので、徐々に強くしていく必要がある。</p>

(作成 農林水産研究所)